

動物たちの反乱

河合雅雄（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）

動物による被害増大

全国的に、今野生動物による農林被害が深刻である（以下、動物は哺乳類をさす）。かつての野生動物による被害は、もっぱらイノシシ、ノウサギとネズミで、ノウサギによる林業被害が大きかった。今はイノシシは相変わらずだが、他の主役はすっかり代り、ニホンジカ、ニホンザル、ツキノワグマ（以下、シカ、サル、クマと称す）、それに外来種のアライグマとヌートリアである。また、ニホンカモシカの生息地では、林業被害がかなり大きい。北海道は本州とは別の動物相をもつが、エゾシカ、ヒグマ、キタキツネ、トドといった哺乳類の被害問題に悩んでいる。



被害総額も平成19年では、全国で132億円、兵庫県で8億円と、かなりの額である。そして、被害金額よりもむしろ問題は、精神的な被害である。一生懸命半年間も丹精こめて作った作物をむざむざ山の動物に食べられると、言いようのない怒りがこみあげてくるのも無理ないことだ。あげく「なぜ野生動物を保護する必要があるのか。悪いやつはみんな殺してしまえ」と強硬に言いहारる人さえいる。

動物も被害者

一方、動物の方も同じく大きな被害を蒙っている。平成18年にはツキノワグマの里への放浪が多かったため、5,147頭が捕獲され、5,000頭近くが殺処分された。また、ニホンザルは保護獣にもかかわらず、毎年1万頭前後が殺されているし、特別天然記念物のニホンカモシカでさえ、毎年約1,000頭が同じ運命を辿っている。

人里へ出てくる野性動物は、一般に悪いやつだとの烙印を押されている。しかし、今日の講演のタイトルを「動物たちの反乱」としたのは、動物たちはやむをえず人里へ出るようになったのであって、そうさせたのは人間たちではないか、という動物たちの切ない抗議の叫びを代弁したものである。

動物社会にも異変

動物社会にも、異変が起こっている。一番よく調べられているニホンザルを例にとると、第一に行動域の異常な変化である。環境が比較的安定している生息地では、群れの行動域（ホーム・レンジ）はほぼ一定で、世帯を超えて伝えられている、というのが今までの定説であった。ところが、多くの群れで行動域が非常に拡大しはじめている。

信州ではサルの群れが高山へ侵出し、お花畑の高山植物を食い荒らし、ライチョウの卵まで被害を受けている所がある。信じがたい事件が、宮城県で発生した。色麻町に突如40頭余りのサルの群れが現れた。約30kmはなれた山から移動してきてのものである。この群れは主群から分裂した群れである。通常分裂群は主群に隣接してテリトリを持つものだが、この移動群は適地がなく新天地を求めて大移動したものであろう。

もう一つわかっている大きな問題は、ツキノワグマの人里での放浪である。通常クマの生息地は奥山であって、里山への出没すら少なかった。ところが現在は、人里をうろつき、はては神戸市の北区まで出没するという、かつては考えられなかったことが起こっている。山の食物

が凶作のとき、出沒回数が増えることがわかっている。兵庫県では、山が豊作だった平成 21 年には、クマの人里での目撃回数は 180 回だったが、山が凶作の 22 年では、1,614 回という高頻度の値を示した。

しかし、山の食べものの豊凶は、今に始まったことではなく、ずうっと昔からあった自然現象である。そして、1980 年頃まではクマは奥山の動物で、人里に出てうろつくという無茶な行動は決して見られなかった。

イノシシは伝統的に昔からの野荒らしの元凶であるが、他の動物が今のように人里へ出沒すること自体が、異常な現象だと言わねばならない。なぜこのような事態になったのか、その原因は次の四項目にまとめられる。

1. 里山の崩壊
2. 野生動物の増加
3. 農村の構造的変化
4. 野生動物の保護管理に関する行政の貧困

里山の崩壊

里山の崩壊といっても、里山自身が潰れることではなく、従来荷ってきた役割が崩壊してしまっただけのことである。

里山は薪炭林、建築材の供給、ゼンマイ、マツタケなどの山の幸を恵む、肥料などの供給と、農村の生活には不可欠な土地であった。

しかし、昭和 30 年代後半から急激に起こった燃料革命により、里山の最も重要な役割である薪炭林としての価値を喪失することになった。つまり、エネルギー源として化石燃料と電気が主要な位置を占めるようになったからである。そして、里山は手入れすることなく放置されることになった。

大戦後の緑化運動と林業政策

昭和 20 年 8 月 15 日、太平洋戦争が敗戦に終わった。「国破れて山河あり」と杜甫は詩ったが、敗戦後の国土は無惨に荒廃した。里山は過度の伐採が進んで秃山化し、野生動物が減少した。この状況を回復しようと、昭和 25 年に国土緑化推進運動が強力に進められ、天皇皇后御臨席による植樹祭が始まり、民間の植林が強力に進行した。また、林野庁は「林力増強計画」を実施し、有用針葉樹であるスギとヒノキの一斉造林が実施された。奥山も開発され、ブナ天然林はスギやカラマツに置きかえられていった。

昭和 35 年頃から、放置された里山救済を兼ねて、広葉樹林を伐採し、有用材であるスギとヒノキ、高地はカラマツを植林する拡大造林政策が強力に押し進められた。当時の植林の仕方は大面積皆伐一斉植林の方式がとられた。この植林方法がじつは野生動物の繁殖を強力に助長したのだが、このことに誰も気がつかなかったのである。

野生動物の増殖と保護管理

戦後 GHQ の鳥獣担当だったオースティン博士は、鳥獣の激減を憂え、鳥獣保護区を新設し、ニホンザル、雌ジカ、カワウソ、ツシマヤマネコを狩猟獣からはずし、保護することにした。シカは大変減少し、一頭もない県もいくつかあった。カワウソは絶滅し、ツシマヤマネコは絶滅危惧種としてかろうじて命脈を保っているが、戦後の林業政策により、シカとニホンザル、カモシカなどは、急激に増殖することとなった。

それは大面積皆伐一斉植林方式にある。それによって伐採地はすぐ低木や笹の混った草地になった。それは結果として、シカ、地域によってはカモシカ、サル、イノシシ、クマなどの野生動物のための牧場を造成したことになった。とくに保護されているカモシカ、シカ、サルの増殖を強力に推進することになった。

それらと併行して、貿易の自由化の進展につれて南方の格安の外材が輸入され、人件費の高い我が国の林業は急速に衰退していった。植林した針葉樹は成長していくが、間伐や枝打ちなどの手入れがなされないで暗い森になった。下生えは生えず、動物の住めない森になったのである。動物たちは適地を求めて移動し、人里と高山への進出が加速した。

農業の構造的変容

安価な食料と飼料の輸入の促進と、都市化サラリーマン化など経済の近代化により、一挙に農村の過疎化・高齢化が進行した。農家は昭和 35 年には 600 万戸余あったのが、平成 17 年には 285 万戸に減少した。また、農業の機械化と化学肥料の使用により、農繁期以外は耕作地から人影が消えた。

里山が薪炭林として健全な姿を維持していたときは、里山は動物と人との共同利用地だった。人がいるときは動物は姿を隠し、人が去ると動物たちは里山で自由に行動した。つまり里山では、人と動物がお互いに上手に避けあって共同利用する、という默契が成立していたのだ。里山は人と動物がすみ分けて利用する入会地だったのである。

人が里山から撤退してしまったので、その默契が破れてしまった。動物たちがあまり恐れもないうで里山へ進出するようになったのは、人と動物がお互いに避けあって暮らすという平和共存のシステムが壊れてしまったからに他ならない。

ワイルドライフ・マネジメント

野生動物の被害が増大した理由は以上であるが、いくつかの基本問題が複雑に組み合わせられていて、解決は容易ではない。まずすべきことは、被害をできるだけ少くするための具体的な方策を実行することだ。今までは防御柵（綱）を設け、加害動物を猟友会に依頼して除去するという方法である。しかし、猟友会の会員は年々減少しかつ高齢化し、猟友会への依存は限界に達しており、各国で行われているワイルドライフ・マネジメント（WLM、野生動物保護管理）を強力に推進する行政組織が必要である。WLM とは、科学的方法で野生動物の生息地管理、個体数管理、被害管理を行い、人と動物の共存をはかることである。兵庫県では全国に魁け、WLM の実施機関として森林動物研究センターを立ち上げた。このような組織が各県で設立されることによって、はじめて“野生動物の反乱”を治め、人と動物の平和共存が実現することだろう。



ポスター発表会場の様子



茶話会での名誉館長賞授与